



2023.5.30

園長だより NO90

早いもので入園、進級から 2 か月が経ちます。園生活も徐々に穏やかな軌道に乗ろうとしています。ひとり、ひとりの子どもの楽しさを探り、一緒に遊び、安定した生活の基盤を作っている時期にあります。やりたいことを十分やらせてあげられる環境を意識していき自己の楽しさを感じさせてあげること努めたいものです。

「こんな学校があったらいいな」

数週間前に「夢みる学校」という映画の自主上映会に参加する機会がありました。

昔から話題に上がっていた小学校の教育実践のドキュメンタリーです。

通知表がない、時間割がない(程よくはありますが・・・) 教科主義ではなく、体験主義というのでしょうか 児童の興味関心を基にあるテーマにそって学んでいく、子どもの主体性を重視する、大人の指示、命令はない、序列をつくらない、すべての児童に自己肯定感を持てる教育をする学校といえます。

映画ですから公の教育では実現できない(※実現しようと頑張っている学校も多数あります。)理想的な教育が映像で紹介されていきますがこんな学校が増えていけば子ども達の未来も明るく輝いていくはずである。

私が保育の世界に足を踏み入れたころこの映画で取り上げられた長野県伊那小に興味を持ったことがあった。40年以上にも

及んで伝統的な総合学習をしている小学校です。通知表がない、時間割がない、チャイムが鳴らないなど当時の学校では考えられないことであった。 ※今もであるが・・・

「子どもありき」で物事を考える、現在でいうなら子ども中心または子どもを真ん中にしてという表現だろうか 「子どもありき」という伊那市の教育理念があります。 大がかりな家を建てたり、動物を飼育したり、大豆の栽培から味噌づくりをしたり、体験を通じて子ども達の興味、関心そして集中し没頭できる時間を大切にしている学校です。

こんな学校があったらそれぞれの子ども達が毎日、輝けるのだらうと思う。

映画では終始、子どもにとってメリットのあることが映し出されているので反するデメリットは映し出されていない。

当然、自分たちが知っている学校教育とは異なる方法を選んでいるだけに大人の苦労も相当だらうと思いを馳せる。

「総合的な学習の時間」

保護者の皆さんが小学校の頃はこの総合的な学習が盛んな頃だったのではないのでしょうか、もう 20 数年前、各学校では地域の学校や児童の実態に応じて横断的・総合的な学習や児童の興味・関心に基づく学習など創意工夫を生かした学習を推し進めていた。

動物を飼育したり、野菜を栽培したり、地域の探索をしたり、研究指定校なるものも現れ積極的に進めていた。ただ、一部の保護者

などから学力の低下などの懸念も伝えられ授業数も削減していった。

※削減には様々な検討を重ねた経緯がありますが・・・

現在のことはあまり知りませんがそんなこともあり、先に取り上げた映画「夢みる学校」で登場した学校のような独自の教育カリキュラムを持つケースは増えていかない。

そもそも私も優劣をつけられる教育を受けてきて評定、評価は切っても切り離せない。

子どもの豊かになるであろう未来を教科の学力で決められていた。出来の悪い、私は学校教育では重宝される存在ではなかった。

毎日の体験が子どもを育む

保育者になりたての頃、影響をうけた師に本をすすめられた、アメリカの哲学者、教育学者のジョンデューイの「学校と社会」でした。難しい本には気が向かず今でもしっかりと読んでいないが「学校とは暗記と試験に明けられる受動的な学習の場ではなく子ども達が自発的な社会生活を営む「小社会」でなくてはならない」と唱え、伝統的な学校に批判を加え自ら創設した学校での体験が綴られたものでした。 78 年も前、戦後の教育改革に影響を与えた書物だった。

なぜ 読むことをすすめたのか 100 年以上も前の教育思想から現代につながるものがあると伝えられたのであろう。子どもと生活するうえで「保育は人の手でおこなうもの」子どもがいて 穏やかに心地よく 楽しいな

と感じて生活できることが生活の基盤にあることが大切と教えたかったのでしょうか。

おおぞら保育園で大切にしたいことのひとつに教育(教えることに偏る)ものはできるだけ削いでいきたい、大人が子どもの真ん中にいて、知識を教え込むことは避けたいと考えています。

目の前の子ども達を見て、感じて、成長を理解して、子どもの興味関心不思議だな なんだろう どうしてだろうという探求心、好奇心が子どもの活動の基にあることを考え、生活を作り、送れるようにしたいと考えている。

一斉画一に生活行動を管理すれば大人の労力は軽減する。ただ、子どものことを中心にすえて 物事を考えていくとかなりの労力が必要とされる。

簡単な保育ではないことは確かです。子ども達、それぞれに寄り添いたいという思いを成すのは難しい事だと思っています。乳幼児期の数年に子ども達に適切な手間をかけてあげなくてはより良い育ちはないでしょう。

当たり前のことですが その当たり前が難しい挑戦なのです。

(おおぞら保育園 園長 廣部信隆)

